

二階は短い廊下が伸びていて、向かい合うようにしてふたつのドアがあった。

ネックは右の船長の部屋のドアをゆっくりと開けた。

六畳ほどの薄暗い部屋。窓からは陽が入らず、湿った空気が流れていて、汚れたシャツと手袋が落ちている。簡素なベッドにある毛布は乱れたままで、机には書類が散乱していた。よほど慌てていたのだろう。

「ひでえなこりゃ」

ネックの後ろから部屋を覗き込み、ノランが言った。

ネックは部屋に入り、机上の書類を順番に見ていった。

年季の入った航海日誌がある。ばらばらとめくって、鍵になる日付に目を通す。

『天気明瞭。海流静穏。視界良好。異常なし』

それから、荷物の集荷にまつわる予定表、日毎の積載貨物の内訳が記されたメモ、船の修繕行程表、よく読めない殴り書き……どれをとっても、足取りを掴むヒントになりそうなものはない。

ノランが

「なあネック、これはどうよ」

ベッドの枕元に置いてある一枚の封筒を見つけた。

ネックが封筒を受け取り、差出人を確認すると掠れた字で『サンチェス・イーザ』と記してあった。

心配に思ったムーサが部屋の様子を伺いにきた。

「何か分かったかい？」

「ねえおばちゃん、船長に家族っている？」

「ああ。たしか『スリミンカ』に親御さんがいるとか言ってたような気がするねえ」

「スリミンカ？」

フィルスト大陸の北部と南部を繋ぐ街、スリミンカ。

ネックは封筒を机に置いた。

「スリミンカつったら、かなり北だよな」と、ノラン。

船長の足取りはわかったかもしれないが、『スリミンカ』に行っても鮮度の高い情報が掴めるとは限らない。そうなればいよいよ大陸の北部を目指すことになる。

「一旦戻ろう、おばちゃんありがとう」

ネックとノランが階段を下りると食堂のテーブルの上でリアムが紙とインクを使って何かを書いていた。

「何してんだ？」

ネックがリアムに言うと

「ここにさ、ノアの情報をくささいって貼り紙をしてもらおうと思って、色んな人が集まるみたいだから」

リアムが言うとムーサがニッコリとしてみせた。既に許諾は得ているようだ。

「そりゃ名案じゃねえか！ 頼むぜ、おばちゃん！」

リアムとノランに後押しされるようにネックも笑って見せた。

せっかく来たからには、この街でできる限りの情報を集めておきたい。

「わかる限りの情報をこの街で集めていこうぜ。漁師が知らなかったっただけで、客船の船乗りにはまだ聞き込みしてねえもんな」

「ああ、そうだな！ これからまた街に出て、調査再開だ！」

ノランが元気よく言うと、

「そうだね！」

リアムは明るい顔をして頷いた。ノアも微笑んだ。

そうしてノラン、リアム、ノアが店の外へと出ていく。

一行を見送るムーサに、ネックは声をかけた。

「なあ」

「ん？」

「船長の置手紙には、何て書いてあったんだ？」

ムーサは「ああ」と頷き、

「そういや、見つけた時からここに入れっぱなしだったような……」

と、エプロンのポケットをごそごそして、

「あ。あったあった」

ムーサはネックに、二つ折りになった手紙を渡した。

ネックは手紙を開き、紙面に目を落とした。

乱れた字で、こうあった。

『化け物が来る』